

レイン7

星祭りの夜

吉野 匠 Takumi Yoshino



アルファボリス文庫



異世界に存在する大陸、ミュールゲニア。

科学文明の魔手はまだこの地を覆うことなく、廃れつつあるとはいえ、いにしえより伝わる魔法も細々と受け継がれている。

そんな、剣と魔法が支配する世界――

魔王レイグル率いるザーマインの猛攻は続く。

ファヌージュは陥落寸前であり、シャンドリスには大量の魔獣を送り込んできた。

だが、それで怯むようなシャンドリス軍ではない。恐るべき魔獣たちの群れを迎え撃つのは、不敗の神将ジョウ・ランベルク！

一方のレインは、各国の結束を呼びかけ、国王同士の会議にまでこぎつけるが、大国の思惑も絡み、その歩みは遅々としたものだった。

ミュールゲニアは、ますますその混沌の度合いを深めてゆく……

しかし、冬が深まり、ザーマインの軍事活動は小休止を迎える。

その頃サンクワールでは、春の到来を願う星祭りが行われていた。レインとシェルファも、束の間の休息を楽しむことに。

――だが、そんな二人の前に刺客が立ち塞がる！



※度量衡はあえてそのままにしています。



主な登場人物

レイン

本編の主人公。本人曰く、「傲岸不遜と常勝不敗が売りの、世界最強の男」

ラルファス

レインの親友で、
サンクワールの
上將軍

シェルファ

サンクワールの
プリンセスロード
姫王。
レインに好意を
抱いている

レイゲル

大国ザーマインを
統べる王



【ガサラム】
レインの副官



【セノア】
レインの副官



【レニ】
レインの副官



【シルヴィア】
ヴァンバイア・マスター



【ギュンター】
レインの腹心。主に諜報を担当



【セルフィー】
レインの部下



【フォルニア】
シャンドリスの皇帝



【ジョウ】
シャンドリスの大將軍



【ノエル】
上位魔人



【マルティン】
義賊



【アリサ】
謎の剣士



【ロイ】
傭兵

目次

プロローグ 悪巧みわるたく 11

第一章 魔獣南下まじゅう 20

第二章 大国の思惑おもわく 57

第三章 蠢動しゅんどう 108

第四章 星祭りの夜 154

第五章 仮面舞踏会
マスカレード 207

エピローグ 我は汝なんじを滅ほろぼす 248

番外編 夜の住人 253

あとがき 356

文庫版あとがき 358

プロローグ 悪巧み

ノックをすると、間を置いて唸るような返事が聞こえ、サラは首を傾けながらドアを開けた。

ビロード地の赤いソファや乳白色の光沢があるジュラ材を使った厚いテーブル、それにやたらと場所を取る天蓋付きのベッド……そんな、実に貴族趣味な家具が揃った部屋に入る。ソファが赤で絨毯も真紅なので、十名くらいで踊れそうなほどの広さと相まって、サラとしても、何か舞踏会場にでも来たような気もする。ただし、文句などない。

サラ自身、今はサテン地の真っ赤なドレスを着込んでおり、趣味的にはデュイイと割と重なるのだ。気の置けない仲でもある。だからこそ、こうして見舞いにも来ている。

無論、好感度を比較するなら、レイグルと比べればデュイイは大差が付いて二番手に落ちてしまう。ただ、サラにとって親しい間柄と呼べるのは、このデュイイくらいしかないなかった。レイグルを愛してはいるが、彼はサラの主であって、間違っても友人ではない。

そのデュイイは、無駄に豪華なベッドで横たわっており、サラを見ると微かに頷いた。

一応、元気を取り戻しつつはあるようね、とサラは一安心する。ファヌージュ戦から

もはや何日も過ぎていてるので、それも当然ではあるが。
怪我を負った二人だけ、一時的にゲイニス城に帰還しているのだった。

「……君はもういいのか？」

サラの挨拶より先に、デューイが訊いた。

「そりゃね。レイグル様に治療していただいたし。ただ、屈辱を受けた痛みは回復してないけどねえ……お陰で、この城で療養を命じられている有様だし」

それは私もだ、とデューイはむつりと返した。それからふとサラから目を逸らし、既に閉まっているドアの方を見た……一瞬だけ。その暗い目つきが妙に気になり、サラは逆に訊いた。

「なんだい、なにか気になることでもあるのかい？」

驚いたように顔を上げ、デューイはしばらく迷う素振りを見せる……しかし、洪々といった様子で教えてくれた。

「……あの日以来、どうも誰かに見張られている気がする。いつもではないが、時折感じるのだ」

自慢の髭を指でしきりに弄り、デューイはそんなことを述べた。

サラは笑わなかった。それどころか、妙にうそ寒いものを感じた。

低い声で問う。

「誰かって、誰にさ？」

「わからん」

自分でもおかしいことを話している自覚はあるのか、デューイの顔には戸惑いが浮かんでいる。

「魔族の、それも私の超感覚を欺けるほどの者が、そうそうこの世界にいるとは思えないのだが。だが、勘違いではない気がする」

「……わかる気がするよ」

サラは椅子を引き寄せて座り、囁く。

「あいつと戦ってからこつち、なんだか嫌な感じがするのさ。あたしは気のせいだと思っ
ていたけど、あんたもとなると、もうそうも言えないねえ」

沈黙が二人の間に落ちる。

二人してひとしきり考え、同時に口にしていった。

『まさかあいつが！』

これまた同時に、顔を見合わせる。

デューイはサラの目を見たまま、慎重に半身を起こし、囁き返した。

「君もそう思うか。あの黒衣の男が我らを見張っているのと？ 人間のエクシードと呼ば

れる能力には、我ら魔族にすらない力が隠されているらしいが……あるいはその力かな」
サラは何度も頷いた。

「それか、シルヴィアとかいう女さね！ 可能性はあると思ったけどねえ。でもこの城は対魔法結界があるし、仮にそれを突破して覗くにしても——」

「——ヤツらがいるサンクワールは、位置的に遠すぎる」

サラの言葉を、デューイが引き取る。

「あの日はたまたまザーマイン本土に転移してきたが、ただ見張るためだけにまた来るとも思えん」

二人は再び黙り込む。

レイン達が原因ではないとすれば、この妙な気配の当事者は他にいることになるが、問題はそこではない。

この謎の誰かが、サラとデューイの二人——つまり魔族中の生え抜き戦士にさえ自分の正体を掴ませない、という点が不気味なのだ。なにしろ二人とも、「何者か」の気配を感じるだけで、相手の正体など皆目わからないのだから。普通に考えて、それは彼ら以上の戦士が二人を見張っている、ということに他ならない。

そこまで考え、サラはいささか馬鹿らしくなってきた。……レインやシルヴィアといった敵共以外に、この世界に自分達の敵がいるはずはないのだ。

同じことを思ったのか、デューイがまた述べた。

「……とはいえ——やはり可能性として一番大きいのは、レインとかいう人間だろう。つくづく、腹の立つことだ」

吐き捨てるような言い方だった。

サラの想像以上に激怒しているらしく、握った拳の爪先が白くなっていた。

「よくもあのような卑劣な不意打ちを。復讐せずにはおれん！」

不意打ち、という点にはあまり賛同しかねたが、復讐についてはもちろんサラも同感である。何度も領さ、賛成を表明した。

「もちろん、やり返すさ！ 今度こそ油断するもんかつ。今からでも行って、ぶちのめしてやりたいくらいだよ」

「……実際にそうしないか？」

いつの間にか、デューイが暗い笑みと共にサラを見返していた。

サラはちよつと驚いた。デューイは自分よりよほど慎重な男だと思っていたので、まだ体調が戻りきっていない今の時点で、まさかそんな提案をするとは思わなかったのだ。

「そうしないかって……これから復讐に行くってことかい、あいつ等の元へ？」

「あいつ等というか、まずはレインという黒服男だろう」

デューイは断言した。

サラと違い、恨みは彼の上に集中しているらしい。ただ、続けて述べたセリフに、サ

ラは少々呆れた。デューイは底意地の悪い表情でこう言ったのだ。

「もちろん、本人にもそのうち復讐するさ。しかし、彼の家族とやらにも痛みを分かち合ってもらおうじゃないか、うん？」

「家族？ あいつにそんなのがいたのかい」

「……幸い、暇だったのだからと調べさせた。ヤツの家族は、北方の小国に健在だ。両親と妹が一人……三人分の命では私の怒りはまだ冷めんが、とりあえずの気晴らしくらいにはなる」

瞳の中に笑顔と同じ暗い炎があった。

「見張られている気配も、所詮は時々過ぎん。隙を衝いてヤツの家族を殺すくらい、容易かろう？」

サラはデューイを見返し、言葉を失う……彼の提案に対して嫌悪を覚えたから、ではない。魔族の常識から言えば、家族ごと敵を殲滅というのは、特に非難されることではないのだ。魔族は家族間の交流など希薄だが、それでもケースとしてはたまにある。そうされるのが嫌なら、相手を先に殺せばよろしい。

ただし……普通は、殺すにしても本来の敵が先だろう。その点、デューイは多少の心得違ひをしている。敵の家族に先に意趣返しというのは、下級魔族ならともかく、上位魔族たる自分達がやるべきことではあるまい。善悪の問題ではなく、体面の問題としてだが、いつもの陽気さを失ったデューイの顔をしげしげと見返すうち、サラにも彼の

気持ちがわかってきた。というより、デューイも気付いていない彼の内心に、図らずも思い当たってしまった。

——おそらく、デューイはレインを恐れ始めているのだ。

自分ではまだ認めていないらしいが、しかし本能ではそうに違いない。さもなくば、こんな道理を外した提案などすまい。

いささか朋輩に対して幻滅したが、それでなくてもどのみち、今の提案はサラには呑みがたかった。というのも――

「……でもさ、レイグル様がどう言うかねえ」

思わず口に出していた。

デューイが神経質そうに、自分の膝を指で叩く。

「レイグル様は関係あるまい。これは我々の面子の問題だろう。第一、人間ごときが何人死のうと、レイグル様が気になさるはずもあるまい」

本当にそうだろうか？

デューイの意見に、サラは迂闊に賛成できなかった。レイグルを愛するが故に、サラは彼の行動や発言を常に注視している。

レイグルは確かに人間を簡単に殺すが、それは同族たる魔族が相手でも同じである。

ただし魔族であろうと人間であろうと、誰かを殺す時には、いつもレイグルなりの理由がある。魔族によくある衝動的な殺戮行為など、彼には全く無縁である。

犯罪者を自ら刃にかけるときでさえ、あれで本人は「修練」のつもりらしい。おまけに殺す相手も、レイグルが「死罪が相応しい」と断定した者ばかりだそうなの。

そういう彼が、果たして「自分がやられた意趣返しにレインの家族を殺す」などという行為を、是とするだろうか？

……サラはとてもしうは思えなかった。

レイグルは昔も今も、人間を特に虫けら扱いしたことはない——はず。柔弱な種族だと口にはしている癖に、むしろ魔族と同等に扱っているフシすらある。

そこは明らかにサラやデューイの感覚とは違う。

しかしもちろん、サラがどちらを重要視するかと言えば、それはレイグルの方に決まっている。

というわけでサラは、今も用心深く言葉を濁しておいた。

「……まあ、レイグル様に進言して、容れられたら乗ってもいいよ。あいつの吠え面を眺めるのは、そりゃ楽しそうだからねえ」

何か言おうとしたデューイをあえて無視し、サラは立ち上がった。

わざとらしく窓の外を見て、

「おお、また雪が降り始めたよ。……この世界じゃ、これからが冬の本番だってさ。め

んどくさいねえ」

——じゃ、また来るからさ。

背を向けたまま手を振り、サラはさっさとデューイの元を辞した。うるさく言われないうちに退散したのである。

部屋に静寂が戻った。

……閉まったドアを眺めたまま、いつしかデューイの瞳に宿った暗い炎は、ますます燃えさかっていた。

「よかろう……君が来ないなら、私だけで実行するまでだ」

第一章 魔獣南下

馬車の中で揺られつつ、エレナ・フェリシア・ハルトウールは、むっつりと考え込んでいた。

向かう先は戦場だったが、別にそれはいい。どうせ戦うのは自分ではなくて臣下なのだから、敵が誰であろうと気にすることなどない。

ただし、ラルファスの側に來てから自分の立場が日増しに悪くなっている気がして、その点はひどく不快である。

いや、正直なところ、これまでは他の者からどう非難されようと、エレナの知ったことではなかった。その者達は決して、面と向かってエレナを罵倒したりはしなかったのだ。しかし、今は事情が違う……大いに違う。

あのレインはもちろん、グエンやナイゼルといったラルファス配下の者達も、エレナには随分と冷たい態度を取る。

態度だけではなく、時には言葉の槍で責めたりもするのだ。

よりにもよってこの私に！

ラルファス様の婚約者であり、名誉ある五家の一角を占めるハルトウール家の当主代行たる、この私に！

いつの間にかハンカチを口にくわえて歯ざしりしていたことに気付き、エレナはよれよれになったそれを馬車の床に叩きつけた。

腹心の執事たるバルドーが、対面の席でおどおどと自分を窺っているのを見て、とりあえず八つ当たりしておく。

「何か言いたいことでもっ」

バルドーは、エレナ好みの美男子だが、ただし胆力は今ひとつである。

そのせいか、今も見苦しいほど慌てて首を振った。

「いええっ。臣はただ、魔獣退治の援軍などに赴く姫様を、ひたすら心配しておるのでして、はい」

黒羅紗で仕立てたタキシードのポケットから自分もハンカチを出し、しきりに額の汗を拭く。

「おまえの心配は、自分の身の安全じゃないだろうねっ！」

「ま、まさかっ。臣は本当に姫様を」

あたふたと言い訳を始めようとしたバルドーから、エレナは冷淡に顔を背ける。

「どうかしらね。最近私を裏切る者が後を絶たないものねっ。おまえがいつの間にか消えていても、今の私は驚かないですわっ」

膝に置いていた白羽扇を取り上げて大きく広げ、わざとらしく自分の顔を扇ぐ。着飾ったドレスのせいで暑いというわけではなく、単にエレナの癖なのだった。「……冗談ごとではなく、このままでは私の部隊が溶けて消えてしまうわ。一体全体、何が不満で、みんな逃げていくのだったか？」

今まで媚びを売っていた臣下の者達が、日を追うごとに姿を消している。昨日は一人、今日は二人と、確実に部隊が弱体化しているのだ。

無論、理由はある。

貴族優遇の政策を捨てたシエルファに対し、いつまでも昔の感覚で接する当主代行に、皆が危うさを感じ始めているのだ。

時代は既に変わっている……大貴族だったエレナ自身の立場も、今のサンクワール国内にあつては強固とはいえない。むしろ、政策転換を内心で快く思わず、昔と変わらぬ態度のままのエレナは、客観的に見ればひどく危険なのである。存在自体、現国王にとつては大いに邪魔ではないか？

サフィールが敗れ、もはや国内はシエルファの天下になっている。大貴族とその一族が全てを支配する時代は、もう終わった——それは誰の目にも明らかである。

つまり、シエルファが自分の意に沿わぬエレナを優遇せねばならない理由もない。

——危ういかな、我が主！

皆、そう思つて彼女の元から去つたのである。

昔と何も変わらないと思つていたのはただ一人、甘やかされて育つたエレナのみである。

ただし、彼女にとつて多少の慰めは、今に至るも、エレナだけを杖として頼る臣下が少なからず残っていることだろう。

眼前のバルドーも、その一人である。

貴族としては下流の家柄であり、その悪知恵と美青年ぶりのみでエレナの鼻根にされているのだ。彼が権力を振るえるのも、エレナが背後にいればこそである。

今更、彼女の元を離れたが最後、これまで辛く当たってきた仲間から八つ裂きにされる恐れすらある。それだけのことをやってきた自覚がバルドーにはあるし、だからこそまだエレナにしがみついているのである。

ただし、理由はそれだけではないが……

「ところでバルドー、あの男を排除する件はどうなっているのか」

揺れまくる馬車に気分が悪くなってきたエレナは、また臣下に八つ当たりした。

「進展してらんだろうねえ？」

「あの男と申しますと、例のレインですか」

「……他に誰がいるのかしら。おまえ、最近、少し鈍くなってきたんじゃないか」

「し、失礼しましたっ。いえ、これまでも大勢の邪魔者を——」

言いかけ、バルドーは口を噤む。

エレナが顔をしかめたのを見て、早口で説明した。

「やってはいるのです、やっては。しかし、直接の暗殺は不可能だとわかりましたし」

「……お待ち。どうして不可能なのっ」

「あの男は化け物です、姫様」

バルドーは店が潰れたばかりの、店主のような表情で両手を広げた。

「リトルドラゴンでも一撃で死ぬ、例のバライソの実際の死酒を飲んで、彼奴は平然としているのですっ」

白羽扇を扇ぐエレナの手が止まった。

貴族の習性として、エレナも毒物には詳しい方なのだ。なにしろ、貴族社会そのものが、邪魔な相手は迷わず殺す」という風潮のある社会なので。

「今バルドーが挙げたバライソの実というのは、昔からのいわば「定番」である。この絞り汁を酒に混ぜて飲ませれば、相手は絶対に助からない。苦しみ間もなく、即座に死んでしまうほど毒性が強い。これなら失敗がないということで、死酒とまで呼ばれている。分量を間違えたのじゃなくて？」

眉をひそめて確認する。

バルドーは大仰に首を振った。

「それどころか。グラスの半分はバライソの絞り汁でした。念を入れて、通常の三十

倍は入れたのです。あいつに惚れた街娘の贈り物だと偽って！」

「さ、三十倍ですってー？ おまえ、無茶しますわね」

エレナがちよつと目を見開く。

それほど入れれば、さすがに元の酒の味が変わってしまうはずなのだが。

「……あいつは本当に飲んだの、それ？」

「ええ、ええっ。使いにやった者の眼前で、飲み干しましたとも。それどころか、カーテンの陰から私自身が、この目でしかと見ました」

何度も頷き、小さなバルドーはまたハンカチで額を拭う。思い出したのか、少し手が震えていた。

「あいつは……あいつは、一息に全部飲み干してみせ、けろりとした顔でお代わりまで要求しました。結局、瓶ごと全部、死酒を呷り、空にしたのですっ」

興奮したのか、僅かに身を乗り出す。

「しかも使いの者に対して、『巻き毛の女主人によろしくな。次の晩酌は、ドレスアップしておまえで頼むと言っといてくれ！ はははっ』などと哄笑までして、いだっ」

エレナの白羽扇を額に受け、バルドーは仰け反った。

「それ、首謀者が私だとバレてるじゃないーっ！」

鼻息も荒く、エレナが弾劾する。

バルドーは懸命に手を振った。

「いえいえつ。どのみちヤツは、誰が狙ったとかそんなこと気にしていいようなので」

「そんなわけあるもんですかー……」

金切り声で叫び、エレナは足でバルドーを蹴る。その手のはしたない真似はあまりしない方なのだが、さすがに今は感情が先に立った。

馬車の中で、中腰のまま、エレナはバルドーを睨め付ける。青ざめた彼としばらく見つめ合い……結局、ため息をついたエレナが、また席に戻った。

声を抑え、

「まあいいでしょう……未だに何も言われないのですからね。証拠もないし、あるいは適当に言っただけかも」

「まさにその通りです、はいっ」

追従するバルドーを無視し、エレナはさらに問う。

「他には？」

「……は」

「は、じゃないわつ。他に手は打ってないの？ あいつを追い出す算段とか、すぐに殺せないとしても、何かあるでしょっ」

「抜かりはありませんともっ」

バルドーは力強く保証した。

「レイン將軍は女好きである、という下級兵士の評判を小耳に挟んだので、一つ手を打

ちました。シエルファ陛下に対し、こっそり大量の偽書を届けさせたのです」

「……よくわからないわね。偽書ですって？」

「つまり、偽の恋文ということですよ」

バルドーは小狡い笑顔を見せた。

「端から見えますと、どうも陛下はレインめを信頼しているようなので、あの男の女癖が悪いと吹き込み、失脚させようかと。女性からの手紙はおろか、その返事までも偽造し、メイドを通じてこっそりと陛下に届けさせました」

「なかなかよくてよ、バルドー」

やっとエレナに笑顔が戻った。

「それで、陛下はレインに不信任を持ったかしら」

「それが……」

にわかにバルドーの勢いが減じた。

またしてもハンカチで汗を拭い、呟く。

「陛下は一読するなり、『誰かがレインを陥れようとしています。この偽書を詳しく調査し、近日中にわたくしに報告してください』と文官を通じてご命令を……大層なお怒りようだったとのことですよ——」

「おまえ、私を失脚させる気なのーっ」

堪えきれずに怒鳴り、エレナはすかさずバルドーを蹴飛ばす。それだけでは飽きたら

ず、指輪だらけの手で、彼の頬をひっぱいた。

「いたっ。いえっ、どうせ我々まで辿れるはずがないので、ご心配には及びません！」

「当たり前よっ。バレたら、おまえの首を刎ねて陛下に届けますからねっ！」

立ち上がってさらにバルドーを弾劾しようとしたエレナだが、まさにその瞬間に馬車

が急停止し、反動で無様に倒れてしまった。
……腹心の膝の上に。

慌ててバルドーを支える。たまたま、支えた位置が、エレナの豊かな胸だった。

「いやあっ。おまえ、どこ触ってるの！」

「うわっ。これは単なる事故で」

「うるさいっ」

エレナの金切り声が、馬車内に響き渡った。

ラルファスとエレナの混成軍が向かう戦場では、既に戦準備が整っていた。

王都ザワールの北方に、シャンドリス軍が陣を敷いている。

大將軍ジョウ・ランベルクが率いる軍勢だが、今回は皇帝たるフォルニアも同行していた。そのこと自体、シャンドリスが事態を重く見ている証拠だった。

この戦準備は言うまでもなく、南下してくる魔獣達を迎え撃つためである。元々の原

因は魔族たるサラにあるのだが、もちろんフォルニアもジョウもそこまでの事情は知らない。ザーマインが関係しているかもしれないとは薄々勘付いているが、特に証拠があるわけでもなく、文句の持って行きようがないのだった。

人間達の困惑をよそに、魔獣達は何日も脇目もふらずに南下し続け、ついに王都まで一日足らずの距離にまで迫ってきている。

それを阻止殲滅するため、シャンドリス軍はここにいる。

念入りに布陣を終え、物見の報告を待つ間、ジョウは天を仰いだ。

灰色の厚い雲が頭上を覆い、切れ目なく地平線まで続いている。

「……もうすぐ、雪になりそうです」

「魔獣達には不利かな？」

馬の轡を並べたフォルニアが、すかさず問う。ジョウは静かに首を振った。

「ほとんどの魔獣は、さほど堪えますまい。むしろ戦いにくくなる分、我々の方が不利でしょう」

「……ふむ」

面白くなさそうに鼻を鳴らしたフォルニアだが、見通しのよい前方を眺めるのをやめ、今度は馬上から背後を振り向く。

総数で八千に近いシャンドリス軍のやや後方には、草木がみっしりと生い茂る深い森が広がっていた。人が足を踏み入れない野生の森であり、街道もここを避けて通っている。

フォルニアはまたジョウを見た。

「ところで、軍議の際は特に訊かなかったが、今回、わざわざ森を背後にして戦うのはなぜか？ 魂胆でもあるのか」

ジョウの種明かしは簡潔だった。

「いざとなれば、あそこに魔獣達を誘い込み、森ごと焼き払うつもりです。既に準備しますよ」

フォルニアは目を見開いてジョウを見た。

「魔獣とは、そこまで恐ろしいものか」

「恐ろしいですとも。特に、集団で襲ってくる時は」

白銀の鎧を纏ったジョウの顔は厳しく引き締まっており、フォルニアが茶化す隙もなかった。フォルニアは金髪をうるさそうに自分の背中に払い、顔をしかめる。

「こうなると、サンクワールの援軍が間に合いそうもないのが痛い。あるいはわざと遅れているのかもしれないが」

ジョウがはつとした顔になり、低頭した。

「……どうした？」

「いえ、フォル様へのご報告が遅れましたので。——サンクワールの援軍は、もうすぐこの戦場に到着します。指揮官はラルファス、数は義勇兵を含め、六千とのこと」

「義勇兵だと？」

「本国にさほど兵力が残っていないので、市井の民を徴募したのでしよう。ラルファスの人望なら、有り得る話です」

フォルニアは実に疑わしそうな表情だった。

「なるほど……まあ助けてもらうのだから、文句はないが。ちゃんと戦ってくれるのだろうか」

「ラルファスは責任感の強い男です。自らの手を汚さず、適当なところで引き揚げろ——などという愚策は実行しますまい」

フォルニアが何を危惧しているのか察したらしく、ジョウは明快に断言した。

「そんな真似をしたところで、お互いの信頼を損ねるだけです」

とそこで微かに身じろぎして顔を上げる。

「……どうした、ジョウ？」

「あいにく、魔獣達の到着の方が先になりました。……上空をご覧ください。フォル様にもすぐに見えるかと」

「なにっ」

フォルニアは慌てて遠くの空を見る。

ジョウの五感と、普通人である自分の感覚には大きな差があるのはわかっているのに、曇天しか見えなくても辛抱強く待った。

やがて、見えた。ポツポツと黒点のような何かが見え、それが次第に大きくなってい

く。こちらに接近してくるのだ。

「見えたぞっ」

声を張り上げた直後、フォルニアはいぶかしむように指摘した。

「しかし……空からばかりだ。地上からは来ないのか」

「まずは、空を飛べる魔獣達が先制する気らしいです。しかし……まずいですね。グリフォンはともかく、バジリスクまでいる」

「なにっ」

フォルニアは顔をしかめた。

「視線だけで相手を殺せるという化け物か」

「そう、邪眼の能力です。……失礼します、フォル様。私自ら、前線で指揮を執った方がよさそうです」

「うむっ。頼んだぞ、ジョウー」

「ははっ」

ジョウが愛馬を駆ると、兵達が一斉に道を空けた。瞬く間に最前線に至り、ジョウは背後を振り返る。ざわめいている味方に、力強く宣言した。

「間もなく敵がここへ来るっ。相手は魔獣であつて、人間ではない。話し合いなど望めぬし、倒すか倒されるか二つに一つしかない相手だっ」

固唾を呑んで見守る味方に、手にした長槍を高々と持ち上げて見せる。

「しかし、恐れることはないっ。最後に勝つのは、今回も我々だからだ」

一呼吸置き、叱声を放つ。

「我々が勝利に疑いなし！」

即座に全軍が唱和した。

『我々が勝利に疑いなし！』

不敗の神将として尊敬を集めるジョウに率いられた将兵達は、天にも届けとばかりに大声で叫ぶ。手にした武器をそれぞれ天に突き上げ、同じセリフを三度叫んだ。

「よしっ。まずは弓隊、構えよっ」

最前線で出番を待っていた弓兵達が一斉に構えに入り、上空へ狙いを定める。

その間、既に空から来た魔獣の第一波は、それぞれの姿がはっきり識別可能なほど接近していた。鷹の頭と翼を持つライオンのようなグリフォンがいる、巨大な蛇に歪な形の翼がついたバジリスクもいる。他にも飛べる魔獣が幾種類か交じっていた。

ジョウは、「バジリスクの目を見てはいけないっ」と注意するのを忘れなかった。戦いの最中に無茶な話だが、しかしジョウ自身はともかく、普通の兵士は邪眼に対抗できる術がないのだ。

「まだだ……まだ早い」

左手で弓隊を制し、ジョウは先制の機会を窺う。空中でグリフォンが攻撃のために巨大な口を開けた途端、号令した。

「今だっ、攻撃開始！」

すかさず、大気を切り裂く矢音が満ちた。

千を超す弓兵が放った矢は、文字通り天を覆わんばかりに真つ黒な固まりとなり、上空のグリフォンとバジリスクの群れを襲う。

弓兵は普段の訓練通り、射終わると流れるような動きで次の矢をつがえ、隊長の号令と共に第二射を放つ。結果、ほとんど間を置かず、次々に矢の一斉攻撃が成された。

的となる魔獣がそれなりに大きいので、無駄な外れ矢は少ない……面白いように命中する。一拍置き、背筋が凍るような鳴き声が天から降ってきた。

魔獣達は空で暴れ、幾匹かは地上に落下してもがいたりしたものの、ほとんどは即死に至らなかった。怒り狂って、羽をばたかせただけ——という方が多いだろう。

元々、魔獣と人間とは、肉体構造がまるで違うのだ。人には致命傷でも、彼らには浅傷にしかならない場合が多い。

そして、すぐさま反撃がきた。

怒り狂ったグリフォンが、大口を開けて魔力を発動させ、熱線を浴びせたのだ。天より、灼熱の光撃が容赦なく降り注ぐ。たちまち、陣のあちこちから悲鳴が上がった。

兵士が十人単位で真つ黒に炭化して倒れ伏し、運良く直撃を避けた者も、付近を熱

線が通過しただけで、皮膚が焼け爛れて地面の上を転げ回っていた。

「水っ、水を頼むっ」

生き残った兵士の多くがそう叫んでいた。

火傷は厳密には火ではなく魔力の熱によるものなのだが、ひどい熱で火傷を負うのは同じなのだ。

彼らの悲惨な呻きや悲鳴は、当然ながら全軍の動揺を誘った。日頃は剛胆な将兵達も、仲間の悲鳴を聞き、身を震わせた。

味方の動揺を察したジョウの、凜とした声が戦場に響く。

「ライトニング・ソード！」

地上より、稲妻を纏った光の剣が走り、着地しようと油断していた魔獣達を薙ぎ払った。偶然、固まっていたグリフォンが一撃で羽を焼かれ、あるいは身体から煙を上げ、他愛なく錐揉み状態で落下する。

「おおっ……大將軍！」

お陰で、伝染しかけた兵達の動揺は一瞬で収まった。

「ライトニング・ソード!!」

ジョウはさらにもう一度、雷系の上級魔法で魔獣を迎撃した。

背後を振り向き、味方に檄を飛ばす。

「恐れるなっ！ 魔法が使えたとしても、所詮、敵は人間ではない。小細工を弄さない

分、戦いやすいのだつ。兵力で比較すれば我々が圧倒的に上だぞつ」

続けて指示を出す。

「弓兵^{ゆめひ}。怯む^{ひる}ことなく、矢を射^い続けるのだつ。歩兵^{はへい}は地上からの攻撃^{こうげき}に備えよ！魔獣^{まじゅう}が降り立^たったら、大勢で押し包^{かき}んで倒^{たお}せ。決して少数で当たらうとするなつ」

ジョウの命令に兵達^{へい}が応^{こた}じた直後、矢雨^{やあめ}をくぐったグリフォンとバジリスク達が、陣^{じん}地のあちこちに降り立^たった。

グリフォンは鋭い爪^{すずめ}と牙^{くは}で味方を切り裂^さき、バジリスクは太い尻尾^{しっぽ}と邪眼^{じやがん}を駆使^{くし}して犠牲者^{ぎせいや}を増^ふやしていく。特に邪眼^{じやがん}の威力^{ごうり}は凄まじく、うっかり視線を合わせた者は、物も言^いわずに倒^{たお}れる始^{はじ}末^{まつ}である。

しかもその兵士の顔^{かほ}が、ことごとく断末魔^{だんまつま}の恐怖^{きょうふ}に彩^{いろど}られている。間近で死神を見たような表情^{しやうひょう}であり、将兵^{しやうへい}達の恐怖^{きょうふ}を煽^{あお}った。

またしても怒号^{どごう}と悲鳴^{ひめい}が満ちたが、しかし今回の動揺^{どうごう}はすぐに収^{おさ}まった。兵達はジョウの命令^{めいれい}通り、各所^{まじゅう}で魔獣^{まじゅう}を囲^{かこ}んで力押しで勝負を挑^{いど}み、敵^{てき}を切り刻^きんでいく。バジリスクの邪眼^{じやがん}で味方^{みかた}が倒^{たお}れても、友軍^{ゆうぐん}の死体^{したい}を乗り越^よえて喚^{わめ}きながら長槍^{ながやり}を突き出^でし、剣を振^ふるう。

たちまち魔獣^{まじゅう}の断末魔^{だんまつま}の鳴き声^{ななきこゑ}があちこちで上がり、血飛沫^{ちしぶき}が大地^{だいち}を染^そめた。

「よしっ」

ジョウが前方に視線^{しせん}を戻^{かへ}した途端^{とたん}、遙^{はる}かな地平線^{ちへいせん}上に黒い横線^{よこせん}が見^みえた。微^さかな地響^{じひび}



きも伝わってくる。今度は飛べない魔獣を中心として、荒野を駆けてきたのだ。

むしろ、こっちが本軍と言えるだろう。

「魔獣といえど、戦力を集中させる程度の知恵は働く……やっかいだな」

ジョウは人知れず呟いたが、だがそれで怯みはしなかった。すぐにきつと前方を睨み付け、片手を上げる。

「よしっ。いよいよ本格的な戦になるぞっ。騎馬隊第一陣、突撃準備っ」

『おぉーっ！』

弓隊が後方へ退き、替わって温存されていた騎士を中心とする騎馬部隊が前へ出る。シャンドリスの本軍が、気合いの入った声で応じた。

——その時である。

まさに突撃を開始しようとしていたシャンドリス軍の左手——つまり西側より、新たな土煙が上がるのが見えた。

新たな敵かつと全軍が緊張する中、ジョウは早くも相手の正体を感じ取っていた。

「大丈夫だっ。あれはサンクワール軍だ。援軍が来てくれたぞっ」

あたかもジョウの声に應えるように、一頭の馬が集団を離れ、シャンドリス軍の眼前に駆けてきた。これまでに何度も戦を経たのか、鈍い銀色に光る甲冑を纏った若者が、ジョウを見つけて低頭する。

「ここは戦場故、馬上にて失礼しますっ。私はラルファス・ジュリアード・サンクワール

の臣にて、ナイゼルと申す者！ 主君の命により、口上を伝えに参りましたっ」

まだ少年のような顔つきに見えるが、彼の声は力強く、シャンドリス軍の後陣まではつきりと聞こえるほどだった。

ジョウはすぐに応じた。

「遠路、ご苦労っ。して、口上とは？」

「はっ。主君ラルファスは、『シエルファ陛下のご命令で援軍に馳せ参じたのにもかかわらず、功なく帰城しては騎士の恥である。故に、着陣の挨拶は後のこととして、まずは敵と戦いたいっ。この件、平にご容赦願う』とのことっ」

ナイゼルの言葉通り、サンクワール軍は既に騎士の全員が槍を構え、突撃準備を整えている。軍勢を停止させることなく、そのまま戦闘に移る気らしかった。

ジョウは一応は背後を窺い、フォルニアが頷くのを確認した。

……実にあの男らしい、とジョウは思う。

元々、ラルファスが保身などとは無縁な男だとは知っていたが、やはり実際にその証拠を見るのは嬉しかった。なにしろ、全くの他人というわけでもない。

「口上、確かに承った！ 騎士の本分、存分に果たしていただきたい。無言論のこと、我々もすぐに続かせていただくっ」

伝令のナイゼルはそれを聞き、ただ一言、「有り難しっ！」と返し、馬首を翻して去った。無駄を嫌う性格らしく、余計なことは一切、言わなかった。

そして、彼が去るのとサンクワール軍が突撃するのは、まさに同時であった。緩やかな進軍をやめ、騎馬部隊が全速で駆けていく。

迫り来る魔獣の大軍の横腹を突き、たちまち混戦に入ってしまった。

ジョウは味方を振り返り、槍を突き上げた。

「自国の窮状に、援軍のみを戦わせたとあつては、我が国の恥だ。我々も行くぞつ。第一陣、突撃準備！」

大喊声が湧き起こった。

魔獣との戦いは、サンクワール軍の参戦により、緒戦は混成軍の優位で推移した。打ち合わせたわけでもないのに、サンクワール軍が魔獣達の横腹を突き、シャンドリス軍が敵の正面から当たるといふ、ごく自然な連携作戦が功を奏したのだ。

両軍共に意図していなかっただけに、魔獣達は簡単に足並みを乱した。

ただし、それはあくまで緒戦の話である。敵の先頭集団にいたのが魔狼やデユラハンといった足の速いモンスター達であり、彼らは魔法を使えない分、まだしも御しやすかったのである。

シャンドリス軍とサンクワール軍、それぞれ数十の死者を数えはしたものの、大勢で囲んで倒す作戦のお陰で辛くも勝利を得た。

双方の軍勢から歓声が湧いたが、ラルファスは手を上げて味方を抑えた。

「……敵の後続が来る。今度は簡単にはいかないぞ」

彼の視線の先には、急速に接近する敵がはつきり見え始めていた。真つ先に駆けてくるのは、またしても魔狼である。本物の森林狼よりやや体格が大きく、やたらと数が多いが、こいつらは名前の割に魔法を使えないので、油断さえしなければ、勝てない相手ではない。

問題なのは、その後ろから来るヤツらだろう。巨大なフェンリルや魔法のオーラを纏ったヘルハウンド、それに雷光を纏った雷獣やミノタウロスまで続いている。

さらにその上空には、新手のグリフォンやバジリスク達も向かってくる。後はもう、名も知らぬ魔獣も含めて、何匹いるのかと思うほど押し寄せてきていた。

「……大将、翼竜も来ましたな」

グエンが睨めになって遠くを見やり、呟いた。相変わらず動揺の欠片も見当たらないが、彼とて龍族を敵に回す恐ろしさは知っているはず。ただ、口にしないだけだろう。「確かにいるな……。やつかいだが、戦い抜くしかあるまい。レインも援軍を送ると言うてくれたが、可能なら自分達だけでなんとかせねば」

グエンが横目を使った。

「ほおー。レインの大将は相変わらず気を遣いますなあ。では、なおさら援軍より先に片付けなくちゃいかなですな」

「その通りだ」

山賊顔のグエンに、珍しくナイゼルが賛同した。

彼は第二陣のはずなのに、早くも鎧を魔獣の血で斑に染めている。おそらく、上空から落下してきたヤツを片付けたのだろう。出番が来る前に存分に戦っていたわけだ。無論、第一陣のグエンなどは、既に全身が返り血で真っ赤である。

ラルファスは魔剣ジャステイスを抜き、真紅の輝きを放つ刀身を差し上げた。

「行くぞっ。ここからが真の戦いだっ。みんな、励めっ！」

騎士も歩兵も手にした武器を突き上げて応え、戦意の衰えていないことを証明した。新手の敵を見据えつつ、ラルファスはふと上を見る。純白の鷹が、悠々と飛んでいるのが目に入った。あたかも戦闘を見守るかのようには、大きく上空を旋回している。

「大将、命令をつ」

グエンに言われ、ラルファスはすぐに視線を戻した。

「よしっ。第二陣の攻撃準備に入ろう。ナイゼル、頼む！」

「ははっ」

ナイゼルが恭しく低頭し、すぐさま馬首を巡らせた。

「行くぞっ。僕に続け！」

号令一下、細長い陣形を保って戦場を駆け抜けていく。正面の戦闘はシャンドリス軍に任せ、自分達は別方向から攻め入るつもりなのだ。

ナイゼルの騎馬隊は疾走を続け、シャンドリス軍の第二陣が魔獣の本隊と激突した途端、予定通り魔獣達の側面を衝いた。

たちまち獐猛な吠え声が無数に起こり、まずは魔獣の群れが襲いかかってきた。彼らは恐ろしく足が速く、かつ本物の狼より凶暴である。ナイゼル軍のそこかしこに躍り込み、騎士達を各個に襲い始めた。

魔獣を見て馬が怯えて立ち止まり、振り落とされる者が続出した。悲惨なことに、彼らのうちかなりの数が、味方の騎馬によって踏み殺されてしまった。

仮に馬をなだめることができて、飛びついてきた魔獣に肉ごと首を噛み千切られ、騎士達の血が大地に滴る。

しかし、ナイゼルその人だけは、際だって鮮やかな戦いぶりを見せた。

自分の首筋を狙ってきた二匹の魔獣が大地を蹴って跳んだ途端、彼は鞘走らせた長剣を豪快に薙いだのだ。苦鳴を上げる暇もなく、魔獣達が首を飛ばされてしまう。血泉を噴きつつ自分達の中心に落ちた首を見て、魔獣達が怒りの遠吠えを放つ。

なおも次々に襲いかかる魔獣に対し、ナイゼルは器用にも右手に長槍、左手に長剣を持って当たり、己の身に牙を寄せ付けなかった。

終始、激したところのない戦いぶりのくせに、槍や剣を振るう時は必ず敵を仕留めしてしまうのだ。

「ナイゼル様っ！」

指揮官の奮戦ぶりを目の当たりにした味方は、たちまち勢いを盛り返した。恐怖に捕らわれることなく、数名ずつが組になって魔狼に当たり、その数を減らしていく。

「……それでいい」

部下達を振り返り、胸を撫で下ろしたナイゼルだが――

突然、背筋に冷たいものが走った。

付近にいた部下が何かを叫ぼうと口を開ける。ナイゼルは、警告を待たずに自ら鞍を転げ落ちていた。

馬上の有利なポジションに固執せず、自らの勘に従ったことが、結果的に彼の命を救った。次の瞬間――際巨大な体躯を誇る魔狼が躍り込み、ナイゼルの代わりに彼の愛馬を噛み千切った。

そう、文字通り、馬の腹を巨大な牙で引き裂いてしまったのである。嘶く暇さえなく、愛馬は真つ二つになっていた。

「なんだっ」

大地を転がってすかさず立ったものの、さすがのナイゼルも、すぐには相手の正体がわからなかった。魔狼か？ いや、違うっ。

「これはフェンリル!! 百の魔狼に勝るといわれた魔獣かつ」

正体を見極めるのと、フェンリルが襲ってくるのが同時だった。速いどころか、そもそも動きが口クに見えなかった。真つ白な固まりが巨大化を遂げたようにしか見えず、

ナイゼルが気がついた時には、既に全長十メートルはあろうかというフェンリルが、眼前に迫っていた。

部下の悲鳴が聞こえた。

「ナイゼル様っ」

長剣を持ち上げようとしていたが、もう間に合わず、あわやナイゼルが丸呑みにされるかと思われた――が。

横から飛来した何かがフェンリルの首に刺さり、巨大な魔獣はナイゼルの眼前で倒れた。

「――!! ジャステイスっ」

真紅の輝きを持つ魔剣が、巨大狼に突き立っている。ナイゼルはとっさにフェンリルに飛びかかった。敵はまだ死んでおらず、立ち上がろうとしていたからだ。

渾身の力を込めて魔獣の首に長剣を振り下ろす。たちまちフェンリルの怒号が迎いに満ちた。追撃を受けてもおお、この魔獣は戦意を鈍らせていないのだ。

逆にナイゼルの方が、噛み付こうとしているフェンリルに気付き、飛び退く始末である。「ナイゼル、無事かっ」

遅れてやってきたラルファスが馬から飛び降り、すぐさま加勢に来た。自らジャステイスを引き抜き、跳ね起きたフェンリルに立ち向かう。

耳が痛くなるほどの吠え声がした。

身を捌き、飛びかかってきたフェンリルを見事に避けたラルファスは、位置を変えてまた対峙した。直後、両者が同時に動く。

大口を開けて襲いくるフェンリルに、ラルファスは自ら突っ込んでいった。

「將軍っ」

ナイゼルの眼前で、ラルファスは魔剣ジャステイスを素早く突き出す。フェンリルとラルファスはおつれ合うように倒れ、見ていたナイゼルは青ざめた。

「將軍っ、ご無事ですか！」

「私は無事だっ」

ラルファスの声がフェンリルの下から聞こえた。ナイゼルと部下達が数名、フェンリルの死体をどかせる……まだ魔剣の柄を握ったままのラルファスがいた。刀身は根本までフェンリルの胴体に埋まっているが。

「久しぶりにおまえの慌てる声を聞いたな」

破顔したラルファスに、ナイゼルはやつと胸を撫で下ろす。手を貸してラルファスを立たせた。

「……無茶をなさらないでください」

ナイゼルの肩を叩こうとして、ラルファスは表情を引き締めた。

——風切り音が聞こえるっ。

見上げれば、翼竜が数匹、上空から一気にこちらに降下してくるところだった。

「まずいつ。ブレスの射程に入るっ。みんな、その場に伏せろ！」

しかし翼竜は既に辺り一帯を人間達ごと焦土に変えるべく、炎のブレスを吐き出すとしていた。

ラルファスは翼竜が剥き出した牙の奥に、オレンジ色の炎をはっきりと見た。

覚悟を決めかけたその刹那——

信じがたいことに、少女の声が出た。

「ライトニング・ストーム！」

目を灼くかと思うほどの閃光が弾け、ラルファスは思わず目を逸らした。

上空一帯を、青光りする雷が乱舞したのだ。本当に乱舞したとしか言いようがないほどの有様で、無数の雷光が、ラルファス達の頭上を一瞬のうちに通過した。

その進路にいた翼竜達はモロに攻撃を受け、巨体から煙を上げて落下してくる。反撃どころか、鳴き声一つ上げる暇がなかったようである。自分達の足下に落ちてきた一匹を、ラルファス達は慌てて避けた。

ラルファスはおろか、兵士達も次々に上空を見上げる。曇天にまだ青い残光が幾筋も残されていた。……ナイゼルが呟く。

「雷系の最上級魔法だ……書物でしか知らない。あいつがやったって言うのか」

彼にしては珍しく、声に驚きが滲んでいた。

それもそのはずで、今のはどう見ても、上空に浮かぶ少女がやったとしか見えないからだ。ラルファスでさえ、驚きのあまり、とっさに声が出なかった。

この真冬に、純白のショートパンツと薄いブラウス、それに同じく白いマントのみの軽装——そんな格好の少女が、片手を細腰に軽く当て、上空で優雅に低頭する。ワイン色の瞳が生氣に満ちて輝いている。

「……こんにちは、皆さん。今日は良い天気ですね」

ラルファスは自分も低頭し、微笑んだ。

「シルヴィア・ローゼンバーク……貴女が来てくれたか」

「ええ……そろそろお力添えがいるかと思ひまして」

「助かった。どうもありがとう！」

「気にしないでくださいな……皆さんのためではなく、レインのためですしね」

身も蓋もない言い方だったが、ラルファスは気を悪くしたりはしない。窮地を救われたのは事実なのだ。

再び一礼したが、シルヴィアはさらに上空に舞い上がった後だった。

およそ百メートルほど上昇して、シルヴィアは戦局全体を見渡す。

シャンドリスとサンクワールの連合軍は善戦しているが、翼竜やリトルドラゴンまで現れ始めた以上、とても楽には勝てないはず。現に、ラルファスにくっついていた貴族軍の一部は、もう瓦解しかけていた。

あれはまあどうでもいいが……レインの代理として来ている以上、これ以上の損耗を見過ぎすわけにもいかない。

シルヴィアは吐息をついた。

「……仕方ないわね。人間を手助けするのは、気が進まないのだけど」

羽織っていた純白のマントを脱ぎ捨てて。

雪が降り始めており、寒風が容赦なく吹きつけてきたが、シルヴィアにとつてはなんの差し障りもなかった。地平の向こうから、そして遥かなる空の彼方から押し寄せる魔獣達を眺め、上唇を桃色の舌がなぞる。

「かつて、人間嫌いのあたしは聖戦に加わらなかった。魔族達があたしとの戦いを回避した以上、戦う理由もなかったから。でも、今回はそうも行かないわねっ！」

見開いたシルヴィアの両眼が、いつしか透き通るような薄赤から、真紅に変わっていた。たまたま至近に迫っていた数体のバジリスクが、邪眼で彼女を見据えたが——逆に雷光に打たれたように一瞬身を震わせ、そのまま落下していく。

シルヴィアの瞳を直視した途端、後悔する間もなく絶命してしまったのだ。

「……弱いわね、おまえ達。弱いからこそ、真の強者が見えぬのか。全ての魔獣は、所

詮我が敵ではないというのに――

次の瞬間、シルヴィアの叱声（しつせい）が戦場全体（としろ）に轟いた。音量はさほどでもないのに、全ての兵士全ての魔獣（まじゅう）が、例外なく彼女の声を聞いたのだ。

「魔獣共よ、我を恐れよ！ このシルヴィアに立ち向かうことの愚かさ（おろ）を思い知る（がい）いつ」

短い呪文（じゅもん）の後、右手を天に突き上げる。

「我が眼前（がんぜん）から消え失せなさい。デストラクション・フロム・ヘブン！」

言（げん）下に雲を突き抜け、天空より灼熱（しゃくねつ）の閃光（せんこう）が飛来（ひらい）した。巨大な光の剣は魔獣（まじゅう）達の真ん中に落下し、爆発（ばくはつ）的に広がっていく。

ただし衝撃波（しょうげきは）もなく、爆発音（ばくはつおん）すら特（とく）にない……ただ見守（みも）っていた者は例外なく、反射的に目を閉じていた。それほど眩（くら）い閃光（せんこう）だったのだ。

次に目を開いた時、地上の人間達（じんぐ）からどよめきが湧（わ）き起こった。

閃光（せんこう）が照射（しや）された後は円形（えんけい）の穴（あな）になっていて、そこにいた魔獣（まじゅう）が一匹残らず消えていたからだ。

ただ真（ま）つ黒（くろ）な空白（くわんぱく）が残（のこ）っているのみである。

「ありやどういうこつてす！」

ラルファスのそばに馬を寄せたグエンが、らしくもなく小声（こゑ）で訊（き）いた。

「……見た通りだろう。あそこにいた魔獣（まじゅう）共は、あの光（ひかり）に全部焼（や）かれてしまったようだ」

「しかし……」

グエンはしばらく絶句（ぜつこ）した後、やっと続けた。

「今（いま）で、ヤツらの二割（にわり）……いや、三割（さんわり）くらいが全滅（ぜんめつ）しちゃいましたぜ！ 中にはリトルドラゴンや翼竜（よくりゅう）もいたのにつ」

「見た通りだ」

ラルファスは冷静（れいじやう）に返した。

「……驚（おどろ）いたのは、何も人間達（じんぐ）だけじゃない。見てみろ、魔獣（まじゅう）共（ども）が逃（に）げていく。この侵（しん）攻（こう）が、魔族（まじ）に支配（し）された結果（けい）だとしても、彼女（かのう）への恐怖（きふ）心が支配（し）力を打ち碎（くだ）いたんだ」ラルファスが改めて指摘（し）するまでもなく、魔獣（まじゅう）の大軍（たいぐん）は地響（ちびび）きと鳴（な）き声（こゑ）を伴奏（ばくそう）にして遁走（とんそう）しつづあった。今の今まで、不退転（ふたいてん）の決意（けつぎ）で南下（なんが）していたのに、怖（おそ）じ気づいたのか、もはや抗戦（かうせん）の意志（いし）を見せる魔獣（まじゅう）は皆無（みな）である。一匹（ひとひき）の例外（れいがい）もなく、敗走（ばいそう）しつづあった。

なるほど、これがレインの狙（ねら）いだったか、とラルファスは密（ひそ）かに思う。

もちろん、援軍（えんぐん）の意味（い）もあるだろう。ただし、理由は他にもある。

「……これで、敵は同じ手が使えなくなった」

グエンが無言で問いかけてきたので、説明してやった。

「私は間違いないと思っているが、魔獣の南下が魔族共の仕掛けた攻撃だとして、その狙いは明らかだ。つまり、シャンドリス軍の動きを止めたかったんだろう」

グエンは、目が覚めたような顔をした。

「そうか、仮に今回この侵攻を防いだとしても、同じことをまたされたら、その度に防戦しなくちゃいけないくなる。つまり、自分達の手を煩わせずに、シャンドリス軍を無力化できるわけですね」

後をナイゼルが引き取る。

「シャンドリス軍は身動きできなくなり、サンクワールとの共同戦線など不可能になる」
「その通り」

ラルファスは頷き、まだ天に浮いたままのシルヴィアを見上げた。

「……しかし、彼女が我々の側にいるとなると、話は別だ。同じ手はもう使えない。レインが彼女を送った狙いは、他にもあるようだが」

言いかけ、ラルファスは首を振った。

気付いても黙っておく方がいいだろう……フォルニアへの牽制の意味もある、などとは。彼女がまだサンクワールの誠意を疑っているのは、ラルファスの目から見ても明らかなのだ。

グエンは首を傾げたが、ナイゼルはわかったらしく、小さく頷いていた。ただし、彼はそのことはどうでもいらしく、表情に微かな嫌悪を浮かべ、別のことを述べた。
「……レイン様のことはともかく、今の力は、人間が持つには巨大すぎます」

「ご心配をどうも、坊や」

三人の前に、話題のシルヴィアが舞い降りてきた。もはや危険は去ったと見たらしい。婉然と微笑むシルヴィアを見て、ラルファス以外の全ての兵士が、無意識のうちに後退っていた。グエンやナイゼルですら、例外ではなかった。

あまりといえはあまりな力を見て、本能的に怯え……いや、警戒心が兆したのである。シルヴィアは慣れているのか、全く平然としていた。

「あたしは人間じゃないけど、まあ、その忠告は聞いておきましょう。もつとも、人間達の方にこそ、有効な忠告だと思うけど」

顔をしかめたナイゼルを放置し、どこか愉快そうにラルファスを見る。

「あなたは落ち着いているわね。あまり怖がってないみたい」

ラルファスは前へ出て手を差し出した。

小首を傾げるシルヴィアに、笑顔で告げる。

「光を恐れる必要はない。恐れるべきは、闇の方だと思う。助かった、シルヴィア。来

てくれてありがとう」

「光と闇は表裏一体なのよ、お若い人」

握手には応じたものの、シルヴィアはすぐに手を放してしまった。

「どちらか一方だけなんて、有り得ないわ」

「それもわかってるつもりだ」

言い切り、ラルファスは小声で尋ねた。

シルヴィアと自分の腹心二人にしか聞こえないように。

「……あの力、レインも使えるのだろうか」

「今の彼なら造作なく」

簡単に首肯する。

「あるいは、もっと強い力を手中にしているかもね。もっとも、必要に迫られない限り、使う気もないでしょうけど」

グエンが興味津々の顔で口を挟んだ。

「そりやまたどうして？ 持つてるなら、バンバン使えばいいと思うがなあ」

「……強大過ぎる力は、逆に足枷になることが多いのよ。今回は敵のルール破りみたいなものだから使ったけど、本来はやるべきではないの」

「相手は魔族、こちらが使えば敵も使うか。確かに使えないな」

ラルファスは微かに首を振る。

「だが、あいつが使わないのはそれだけが理由ではあるまい。……元より、そういう力が好きではないのだろう」

「自ら望んで手に入れたのに、ですかい？」

疑わしげなグエンに、微笑み返してやる。

「そう、自ら望んで手に入れたのに、だ。求めているからといって、好きだとは限るまい。今のあいつがああいう男なのは、むしろ過去の出来事によると思う。……話してくれたことはないが」

水くさいではないか、という思いがラルファスにはある。最後はやや不満の滲む声になった。

黙って聞いていたシルヴィアは、なぜか声を上げて笑った。五分前よりやや柔らかい目つきで、ラルファスを見返す。

「レインと付き合う唯一のコツは、根気を持つことよ。付き合いやすそうに見えて、あれほど付き合いの悪い人もいないから。まあ、がんばりなさい。あなたとは違う意味ながら、あたしも目下、努力中だしね」

ラルファス以下、三人の驚き顔を見て、優雅に微笑む。その笑顔のまま、遥か後方へちらっと目をやった。

「ところで、あなたの婚約者があつちで怒鳴りまくってるけど、放置しておいていいの？」
ラルファスと副官二人は、期せずしてシルヴィアの示した方向に目をやり、三人同時

に顔をしかめた。

そこには、自分の部隊の前に立ち、白羽扇を振りつつ怒りまくっているエレナがいる。ラルファス軍から離れた位置に固まっている彼女の部隊は、当初より数が少ない。

この戦いで部隊が四散してしまった（逃げたともいう）のか、エレナの怒りようも尋常ではなかった。地団駄を踏んで喚いている、という方が近いかもしれない。

どうして逃げずに戦わなかったのですっ等金切り声が、ここまで聞こえていた。幸い、ラルファス達はくっついてきた彼女の部隊など最初からアテにしておらず、戦の最中に彼らが逃げ散っても、なんら影響を受けていない。

腰抜けの貴族軍など、逃げて当然という意識が将兵の間にあるからだ。むしろ、予想以上に綺麗に崩れたので、冷笑をもつて眺めていたくらいである。

しかし、ラルファスとしては頭の痛いことである。勝手にしてきたくせに、エレナは必ずラルファスに愚痴をこぼすのだった。

「あなた、顔に女難の相が出てるわよ」

急にシルヴィアに言われ、ラルファスは思わず顔を上げた。

「……冗談ではなく、本当に？」

「さあ、どっちかしらね」

シルヴィアがまた、楽しそうに笑った。

第二章 大国の思惑

レイファンの王都は主城を含めてクリスタルパレスという名であり、それはこの国の歴史といささか関係がある。

レイファンは、中原どころか大陸全体で見ても最も古い歴史を誇る国の一つであり、しかも歴代の王は総じて新進の気風を持っていた。現に、数々の新しい文化の魁ともなっている。

その一つが、ガラスである。

現在、大陸に普及しているガラスを最初に発明したのは、この国の職人だと言われている。今となつては確かめる術もないものの、ガラス職人のギルドが存在するのはこの国だけだというのが、ある程度の事実を示しているかもしれない。

ただ、大陸全土で見ると貧しい庶民の家では、未だに窓にガラスが嵌っていない場合も多い。

そのような家で、なおかつ多少の金銭的余裕がある場合は、ガラスの代用を作った。磨いて透明度を高めた角や石などを小さなブロック状にし、それらを細かく区切っ